

第66回萩句会報告 (順不同)

日時 2014年11月10日(月) 14時～17時

兼題「神無月」

- 川井素山 ○菜畑や施肥する背に冬日さす  
神無月眠る赤児の宮参り  
小春日や知らず微睡むコインランドリー  
浮寝鳥遠見に円く繪文字ごと
- 保井寶正 ○雪吊や庭師の技見惚れたり  
落ち切って銀杏落葉の無の世界  
園児らの声突き抜ける黄落季  
おでん酒隠包丁味深し
- 青木英林 ○おちこちに賑わいの輪や酉の市  
初時雨雑木林を潤せり  
大根引子等も交へて賑やかに  
神無月木立の先の曇り空
- 後藤克彦 ○神無月雲間に日矢の神神し<sup>こうごう</sup>  
澄まし顔撮らるるに慣れ七五三  
楓染む山里歩き色楽し  
赤蜻蛉指に留まりて目合わせず
- 佐久間喬 ○神無月白き化粧の遠き嶺  
暮れかけて川遡る鮭の影  
雨上がり銀杏落葉に華があり  
ハロウィン笑顔で集ふ仮装の娘
- 永井正孝 ○一頻時雨肴の縄暖簾<sup>ひとしきり</sup>  
立冬に衣重ねて読書かな  
木枯に犬立止まり屢叩く<sup>しば</sup>  
路地裏に落葉集みゆく神無月<sup>つ</sup>
- 吉田啓悟 ○秋惜しむ洗い晒しの風入れて  
熟柿の木におしゃべりな鳥が居り  
早朝に握る鉄棒神無月  
口癖を人に知られて新酒かな

丸山酔宵子 ○参道に人影も無し神の留守  
月末の支払い済んでおでん喰ふ  
姫嫁つぎ慶ばしけり神有月  
見下ろせば秋の日を浴ぶ赤レンガ

佐久間たか子○大鳥居風吹き抜けて神無月  
祝い日に簪揺らして紅葉晴  
落葉踏む山の暮色沁みるなり  
小春日に上着片手に旅の街

長島清山 ○道を往く人に愁いの神無月  
フクシマやヒロシマとなり巡る秋  
百日紅咲き輝きて森の道  
観音寺煩惱去りて秋風や

佐々木彩女 ○木の葉髪しみじみとただ足るを知る  
鉢巻と法被の吼える酉の市  
冬ぬくしあてなく銀座四丁目  
神無月なに願うても留守につき

菊地崇之 ○善光寺牛はいずこへ神無月  
枯れ落葉熊手の先に舞踊る  
翳雲怒り静むや目を上げて  
紅葉狩<sup>たたら</sup>雅を踏むや石畳

牧野里山 ○芦原の一本道に陽が昇る  
老老の仲睦ましき石路の花  
鮭とぼと夜の一杯木枯来  
曼殊沙華夕陽の中に燃えあがり

佐伯武雄 ○ご無沙汰の時間を戻すおでん鍋  
神無月再開祝うはしご酒  
人恋しおいでおいでと呼ぶ芒  
冬晴れに親子の陰が飛び跳ねる

大山竜海 ○母老いて冬の支度の滞る  
神無月人の群れたる街の宵  
よしいくと胸におさめたる仲秋の月  
犬老いて母も老いたり床の中

山本草風 ○人里に熊現れて冬近し  
ひつじ田に鳥集まり餌談義  
神無月垣根装う古道かな  
新蕎麦や舌鼓打つ音高し

金森純女 ○包丁を研いでなまこの断末魔  
街中の風疾きこと秋惜しむ  
床の間に日差し届かぬ暮れの秋  
母独り逝きたまひしや神の留守

次回「萩句会」

日時 2014年12月8日（月）14時～17時

兼題『炬燵』一句

当季雑詠三句 計四句